

ベクトル解析の記号について (by 山田)

数学で広く用いられる記号と、教科書「ベクトル解析」(矢野健太郎・石原繁 共著, 裳華房)の記号を整理しておく。どちらでも分かるようにして下さい。

0 (山田の) プリントでは,

ベクトル場の記号は \vec{X} や \mathbf{X} を用いる。

板書は前者にする予定。(線形代数学ではベクトルは \vec{x} や \mathbf{x}, \mathbf{x} を使った.)

「ベクトル解析」で特に注意すべきことの1つは,

ベクトル (ベクトル場) と スカラー (スカラー) の記号を区別する

ことである。 $\alpha \vec{a}$ と書けば, α はスカラーで \vec{a} がベクトル。

- \mathbb{R}^3 の座標は 基本的に (x, y, z) にするが, (x_1, x_2, x_3) を用いる (その方が便利な) こともある。「座標は横」で「ベクトルは縦」が通常であるが, このルールは絶対ではない。特に, 点 $P(x, y, z)$ を位置ベクトル \mathbf{r} (\vec{OP}) と見なして縦に表示することが結構ある。
- 「 A_x 」は「ベクトル場 \vec{A} の x 成分」であることが多い。一方, 「 φ_x 」は「関数 (スカラー場) $\varphi = \varphi(x, y, z)$ の x による偏微分 $\frac{\partial \varphi}{\partial x}$ 」であることが多い。文脈で理解しないと学べない。

1 教科書では \mathbb{R}^3 の標準基底 $\{\mathbf{e}_1, \mathbf{e}_2, \mathbf{e}_3\}$ を $\{\mathbf{i}, \mathbf{j}, \mathbf{k}\}$ と表している。

$$\mathbf{i} = \mathbf{e}_1 = \begin{bmatrix} 1 \\ 0 \\ 0 \end{bmatrix}, \quad \mathbf{j} = \mathbf{e}_2 = \begin{bmatrix} 0 \\ 1 \\ 0 \end{bmatrix}, \quad \mathbf{k} = \mathbf{e}_3 = \begin{bmatrix} 0 \\ 0 \\ 1 \end{bmatrix}.$$

従って $\mathbf{a} = 2\mathbf{i} + 3\mathbf{j} - 4\mathbf{k}$ とは $\mathbf{a} = \begin{bmatrix} 2 \\ 3 \\ -4 \end{bmatrix}$ のこと。

$$\mathbf{X} = x^2y^3\mathbf{i} - xy^3z\mathbf{j} + xy^2z(y+z)\mathbf{k} \quad \text{とは} \quad \mathbf{X} = \begin{bmatrix} x^2y^3 \\ -xy^3z \\ xy^2z(y+z) \end{bmatrix} \quad \text{のこと.}$$

2 微分作用素の記号 $\nabla = \frac{\partial}{\partial x}\mathbf{i} + \frac{\partial}{\partial y}\mathbf{j} + \frac{\partial}{\partial z}\mathbf{k}$ とは $\nabla = \begin{bmatrix} \frac{\partial}{\partial x} \\ \frac{\partial}{\partial y} \\ \frac{\partial}{\partial z} \end{bmatrix}$ のこと. (p.21)

3 ベクトル解析の主役 (第3章 p.21, 28, 32)

勾配 (gradient)	$\nabla \varphi = \text{grad } \varphi$	(スカラー場 から ベクトル場)
発散 (divergence)	$\text{div } \mathbf{X} = \nabla \cdot \mathbf{X}$	(ベクトル場 から スカラー場)
回転 (rotation)	$\text{rot } \mathbf{X} = \nabla \times \mathbf{X}$	(ベクトル場 から ベクトル場)

それぞれ, 次のように書くと理由が想像でき, 覚えやすい. (\cdot は内積 で \times は外積)

勾配

$$\nabla\varphi = \begin{bmatrix} \frac{\partial}{\partial x} \\ \frac{\partial}{\partial y} \\ \frac{\partial}{\partial z} \end{bmatrix} \varphi = \begin{bmatrix} \frac{\partial\varphi}{\partial x} \\ \frac{\partial\varphi}{\partial y} \\ \frac{\partial\varphi}{\partial z} \end{bmatrix} = \text{grad } \varphi$$

発散

$$\text{div } \mathbf{A} = \text{div} \begin{bmatrix} A_1 \\ A_2 \\ A_3 \end{bmatrix} = \frac{\partial A_1}{\partial x_1} + \frac{\partial A_2}{\partial x_2} + \frac{\partial A_3}{\partial x_3} = \begin{bmatrix} \frac{\partial}{\partial x_1} \\ \frac{\partial}{\partial x_2} \\ \frac{\partial}{\partial x_3} \end{bmatrix} \cdot \begin{bmatrix} A_1 \\ A_2 \\ A_3 \end{bmatrix} = \nabla \cdot \mathbf{A}$$

回転

$$\text{rot } \mathbf{A} = \text{rot} \begin{bmatrix} A_x \\ A_y \\ A_z \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} \frac{\partial A_z}{\partial y} - \frac{\partial A_y}{\partial z} \\ \frac{\partial A_x}{\partial z} - \frac{\partial A_z}{\partial x} \\ \frac{\partial A_y}{\partial x} - \frac{\partial A_x}{\partial y} \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} \frac{\partial}{\partial x} \\ \frac{\partial}{\partial y} \\ \frac{\partial}{\partial z} \end{bmatrix} \times \begin{bmatrix} A_x \\ A_y \\ A_z \end{bmatrix} = \nabla \times \mathbf{A}$$

注意：grad と div は一般次元 (\mathbb{R}^n) でも扱う。rot は3次元に特有の演算。

線積分 ベクトル場 \mathbf{A} の 曲線 $C: \mathbf{r}(t)$ ($a \leq t \leq b$) に沿う線積分 (p.41)

$$\int_C \mathbf{A} \cdot d\mathbf{r} = \int_a^b \left(A_x \frac{dx}{dt} + A_y \frac{dy}{dt} + A_z \frac{dz}{dt} \right) dt$$

— 教科書では、単位接ベクトル場 \mathbf{t} と C の線素 ds を用いている。

面積分 ベクトル場 \mathbf{A} の 曲面 $S: \mathbf{r}(u, v)$ (u, v の領域 D) に沿う面積分 (p.46)

$$\int_S \mathbf{A} \cdot d\mathbf{S} = \int_S \mathbf{A} \cdot \mathbf{n} dS = \iint_D \mathbf{A} \cdot \left(\frac{\partial \mathbf{r}}{\partial u} \times \frac{\partial \mathbf{r}}{\partial v} \right) du dv$$

\mathbf{n} は 曲面の単位法ベクトル場, dS は面積素, $d\mathbf{S}$ はベクトル面積素 ($d\mathbf{S} = \mathbf{n} dS$) である。中辺の $\mathbf{A} \cdot \mathbf{n}$ は「 \mathbf{A} の \mathbf{n} 方向成分」(スカラー) で、これを教科書では A_n と表している。これを $(\mathbf{A})_n$ と表す場合もある。

線積分の $d\mathbf{r}$, 面積分の $d\mathbf{S}$ は、黒板ではそれぞれ $d\vec{r}, d\vec{S}$ を用いる。

空間での積分 教科書では $dv = dx dy dz$ としている。 dV や $dvol$ と書くこともある。

今までのことから、例えば「発散定理」は、教科書では (p.54)

$$\int_V \nabla \cdot \mathbf{A} dv = \int_{\partial V} \mathbf{A} \cdot d\mathbf{S}$$

であるが、次のように表すこともある。

$$\int_V \text{div } \vec{A} dV = \int_{\partial V} \vec{A} \cdot d\vec{S}$$

曲線, 曲面の扱い方 (by 山田)

曲線に沿う線積分, 曲面に沿う面積分などの計算には, まず曲線, 曲面の扱い方を確認しておく必要がある.

基本的な前提: この講義では, 曲線や曲面は無限回微分可能なパラメータ表示をもつものの和集合として表せるもの(「区分的に滑らか」という)しか扱わない.

曲線 空間の曲線は, 通常

$$C: \mathbf{r}(t) = (x(t), y(t), z(t)) \quad a \leq t \leq b$$

のように表す. 速度ベクトルとその長さ(速さ)はそれぞれ

$$\frac{d\mathbf{r}}{dt}(t) = \begin{bmatrix} \frac{dx}{dt} \\ \frac{dy}{dt} \\ \frac{dz}{dt} \end{bmatrix}, \quad \left\| \frac{d\mathbf{r}}{dt}(t) \right\| = \sqrt{\left(\frac{dx}{dt}\right)^2 + \left(\frac{dy}{dt}\right)^2 + \left(\frac{dz}{dt}\right)^2}.$$

速度ベクトルの長さ(速さ)が常に1のとき, パラメータの文字は t の代わりに s を用いて「弧長パラメータ」という: $\left\| \frac{d\mathbf{r}}{ds}(s) \right\| \equiv 1$. 弧長パラメータの場合, 曲線上の2点 $\mathbf{r}(s_1)$ と $\mathbf{r}(s_2)$ の間の曲線の長さは $|s_2 - s_1|$ となる.

速さを区間 $[a, b]$ で積分すると, 曲線 C の長さが得られる.

$$\int_a^b ds = \int_a^b \left\| \frac{d\mathbf{r}}{dt}(t) \right\| dt = [C \text{の長さ}]$$

ここで, $s = s(t) \left(\begin{array}{c|c} s & a \rightarrow b \\ \hline t & \alpha \rightarrow \beta \end{array} \right)$ の座標変換を用いた.

そこで, C のベクトル線素 ds とベクトル線素 $d\mathbf{r}$ を次で定める. ($d\mathbf{r}$ を \vec{dr} と書くこともある)

$$ds = \left\| \frac{d\mathbf{r}}{dt}(t) \right\| dt, \quad d\mathbf{r} = \begin{bmatrix} \frac{dx}{ds} ds \\ \frac{dy}{ds} ds \\ \frac{dz}{ds} ds \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} \frac{dx}{dt} dt \\ \frac{dy}{dt} dt \\ \frac{dz}{dt} dt \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} \frac{dx}{dt} \\ \frac{dy}{dt} \\ \frac{dz}{dt} \end{bmatrix} dt$$

例えば, ベクトル場 \vec{A} に対して

$$\vec{A} \cdot d\mathbf{r} = \begin{bmatrix} A_x \\ A_y \\ A_z \end{bmatrix} \cdot \begin{bmatrix} \frac{dx}{dt} \\ \frac{dy}{dt} \\ \frac{dz}{dt} \end{bmatrix} dt = \left(A_x \frac{dx}{dt} + A_y \frac{dy}{dt} + A_z \frac{dz}{dt} \right) dt$$

のように用いる. (p.41-42)

曲面 空間の曲面を表すには、2つのパラメータ変数が必要。通常は

$$S: \mathbf{r}(u, v) = (x(u, v), y(u, v), z(u, v)) \quad (D: u, v \text{ の領域})$$

のように表す。曲面上の点 $\mathbf{r}(u, v)$ において、ベクトル

$$\mathbf{N}(u, v) = \frac{\partial \mathbf{r}}{\partial u}(u, v) \times \frac{\partial \mathbf{r}}{\partial v}(u, v) = \begin{bmatrix} \frac{\partial y}{\partial u} \frac{\partial z}{\partial v} - \frac{\partial z}{\partial u} \frac{\partial y}{\partial v} \\ \frac{\partial z}{\partial u} \frac{\partial x}{\partial v} - \frac{\partial x}{\partial u} \frac{\partial z}{\partial v} \\ \frac{\partial x}{\partial u} \frac{\partial y}{\partial v} - \frac{\partial y}{\partial u} \frac{\partial x}{\partial v} \end{bmatrix}$$

は ($\mathbf{0}$ でないことを仮定する) 曲面に垂直「法ベクトル」となる。その長さ

$$\|\mathbf{N}\| = \left\| \frac{\partial \mathbf{r}}{\partial u} \times \frac{\partial \mathbf{r}}{\partial v} \right\| = \left\| \frac{\partial \mathbf{r}}{\partial u}(u, v) \times \frac{\partial \mathbf{r}}{\partial v}(u, v) \right\|$$

を領域 D で積分すると、曲面 S の面積が得られる。

$$\iint_D \left\| \frac{\partial \mathbf{r}}{\partial u}(u, v) \times \frac{\partial \mathbf{r}}{\partial v}(u, v) \right\| du dv = [S \text{ の面積}]$$

そこで S の**面積素** dS , S の**ベクトル面積素** $d\mathbf{S}$ (あるいは \vec{dS}) を次で定める。(p.44-45)

$$dS = \left\| \frac{\partial \mathbf{r}}{\partial u} \times \frac{\partial \mathbf{r}}{\partial v} \right\| du dv, \quad d\mathbf{S} = \mathbf{n} dS = \left(\frac{\partial \mathbf{r}}{\partial u} \times \frac{\partial \mathbf{r}}{\partial v} \right) du dv$$

ここで、 \mathbf{n} は単位法ベクトル (接平面に垂直で長さが1) である：

$$\mathbf{n}(u, v) = \frac{\frac{\partial \mathbf{r}}{\partial u}(u, v) \times \frac{\partial \mathbf{r}}{\partial v}(u, v)}{\left\| \frac{\partial \mathbf{r}}{\partial u}(u, v) \times \frac{\partial \mathbf{r}}{\partial v}(u, v) \right\|}$$

曲面が「向き」をもつ場合は、 \mathbf{n} が向きと一致するように (u, v) -座標をとる。

グラフ型の曲面 $z = \varphi(x, y)$ の場合、 $\mathbf{r}(x, y) = (x, y, \varphi(x, y))$ が座標となり、

$$\mathbf{n} = \frac{1}{\sqrt{1 + \left(\frac{\partial \varphi}{\partial x}\right)^2 + \left(\frac{\partial \varphi}{\partial y}\right)^2}} \begin{bmatrix} -\frac{\partial \varphi}{\partial x} \\ -\frac{\partial \varphi}{\partial y} \\ 1 \end{bmatrix} = \frac{1}{\sqrt{1 + \varphi_x^2 + \varphi_y^2}} \begin{bmatrix} -\varphi_x \\ -\varphi_y \\ 1 \end{bmatrix}$$

$$dS = \sqrt{1 + \varphi_x^2 + \varphi_y^2} dx dy, \quad d\mathbf{S} = \begin{bmatrix} -\varphi_x dx dy \\ -\varphi_y dx dy \\ 1 dx dy \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} -\varphi_x \\ -\varphi_y \\ 1 \end{bmatrix} dx dy$$

となる。

曲線や曲面の向きについて (by 山田)

「方向」と「向き」：ゼロベクトル $\mathbf{0}$ でない (始点の同じ) 2つの ベクトル \mathbf{a}, \mathbf{b} について,

実数 k ($k \neq 0$) を用いて $\mathbf{b} = k\mathbf{a}$ と表せるとき「 \mathbf{a} と \mathbf{b} は同じ方向である」という。

そのうちで, $k > 0$ のとき \mathbf{a} と \mathbf{b} は「同じ向き」, $k < 0$ のとき「逆向き」という。

曲線の向き：

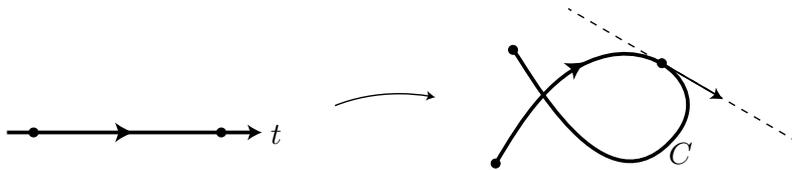
連結な (つながった) 曲線 C の各点 p での接ベクトル \vec{v}_p を

条件： p を連続的に動かすと \vec{v}_p も連続的に変化する

を満たすように C 全体で指定すること

を「曲線の向き」という。すべての点 p で \vec{v}_p と同じベクトルの向きを指定されれば 曲線の向きも同じとみなす。向きを指定された曲線を「有向曲線」という。 C と図が同じで逆向きの曲線を $-C$ で表す。

数直線は 自然な「正の向きに増加する」向きを持つので、有向曲線に座標を与えるときは、数直線の向きと曲線の向きが一致するようにとる。



曲面の向き (空間内の曲面の場合)：

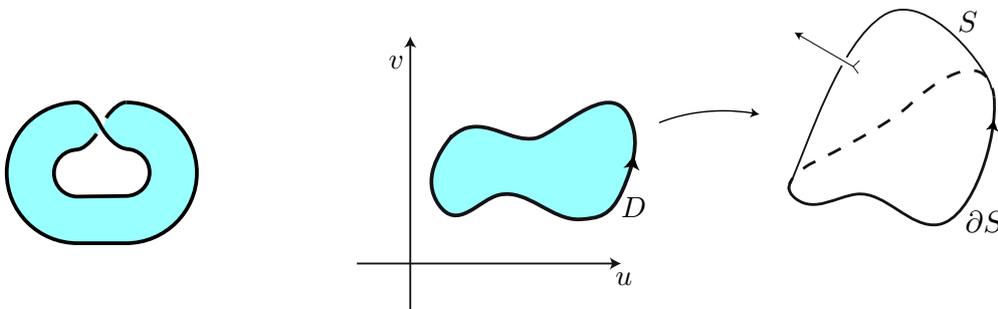
連結な曲面 S の各点 p で 法 ベクトル \vec{n}_p を

条件： p を連続的に動かすと \vec{n}_p も連続的に変化する

を満たすように S 全体で指定できるとき、曲面が「向き付け可能」という。

すべての点 p で \vec{n}_p と同じ向きのベクトルを指定されれば 同じ向き とみなす。その指定を 曲面の「向き」(あるいは「表：オモテ」) といい、向きを指定された曲面を「有向曲面」という。有向曲面 S の向きを逆にした曲面を $-S$ で表す。

向き付け不可能な曲面として「メビウスの帯」などがある。有向曲面に座標 $\mathbf{r}(u, v)$ を与えるときは、曲面の向きが 座標の定める法ベクトル $\frac{\partial \mathbf{r}}{\partial u} \times \frac{\partial \mathbf{r}}{\partial v}$ と一致するようにとる。



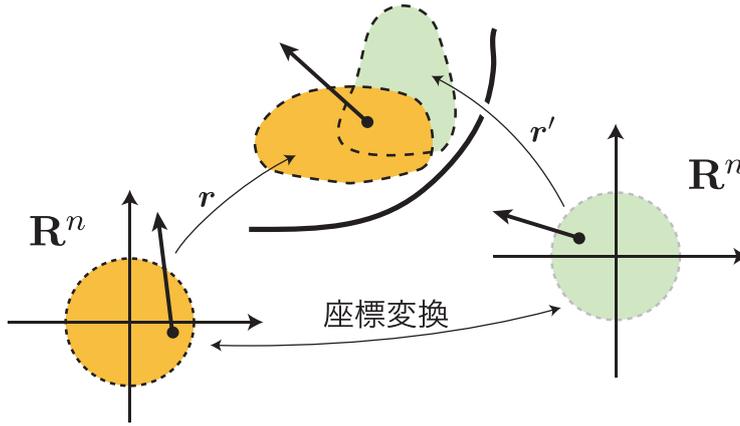
境界の向き：特に断らない場合は、次の慣習「境界としての向き」に従う。

- ・閉曲面 S が空間図形 V を囲む ($\partial V = S$) とき
 S の向きは、 V から外へ向かう法ベクトル “ V から外” で定める。
- ・有向曲面 S が境界 C に囲まれる ($C = \partial S$) とき、
 境界 C の向きは、 S のオモテで “外が右” で定める。
- ・ $z = f(x, y)$ の形の曲面は、通常 z -成分が正の法ベクトルで向きを定める。

球面（球の境界）の下半分のような場合に、特に注意。

発展：一般次元の図形の「向き」

3次元以上の“図形”（正確には「多様体」という）や、 \mathbb{R}^3 より高次元の \mathbb{R}^N 内の曲面では、法ベクトルで向きを定めることができないので、次のように扱う。



・ n 次元の図形 M の、重なりをもつ2つの座標 r, r'

$$r(x_1, x_2, \dots, x_n), \quad r'(y_1, y_2, \dots, y_n)$$

が、重なった部分で 同じ向き か 逆向き かを、

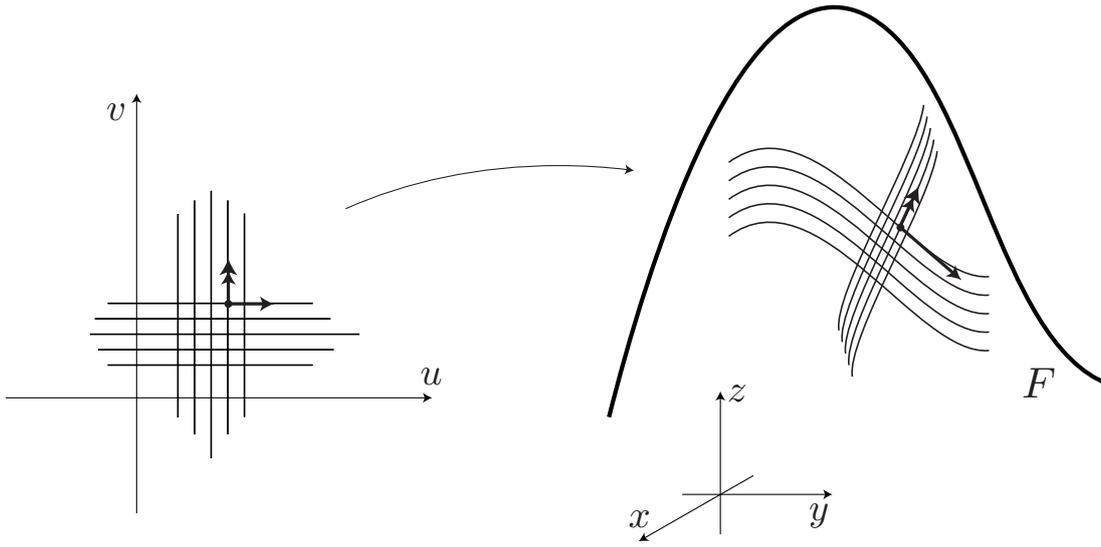
$$\text{座標変換} \begin{cases} y_1 = y_1(x_1, x_2, \dots, x_n) \\ y_2 = y_2(x_1, x_2, \dots, x_n) \\ \vdots \\ y_n = y_n(x_1, x_2, \dots, x_n) \end{cases} \text{ のヤコビ行列式 } \det \begin{bmatrix} \frac{\partial y_1}{\partial x_1} & \frac{\partial y_2}{\partial x_1} & \dots & \frac{\partial y_n}{\partial x_1} \\ \frac{\partial y_1}{\partial x_2} & & & \vdots \\ \vdots & & \frac{\partial y_j}{\partial x_i} & \\ \frac{\partial y_1}{\partial x_n} & \dots & & \frac{\partial y_n}{\partial x_n} \end{bmatrix} \neq 0$$

の符号が 正 か 負 かで定める。（この行列式が0になる点は、その点で座標が退化すること（同一の点が複数の表示をもつなど）を意味しており 座標から除外する。）

・ M が 重なりをもつ全ての組で同じ向きになる座標だけ で覆うことができるとき、 M を「向き付け可能」といい、その座標の指定を M の「向き」という。そうでないとき M を「向き付け不可能」という。

曲面の座標

$$\mathbf{r}(u, v) = (x(u, v), y(u, v), z(u, v))$$



訂正1 プリント「曲線, 曲面の扱い方」の右半分

正:

$$\frac{\partial \mathbf{r}}{\partial u}(u, v) \times \frac{\partial \mathbf{r}}{\partial v}(u, v) = \begin{bmatrix} \frac{\partial y}{\partial u} \frac{\partial z}{\partial v} - \frac{\partial z}{\partial u} \frac{\partial y}{\partial v} \\ \frac{\partial z}{\partial u} \frac{\partial x}{\partial v} - \frac{\partial x}{\partial u} \frac{\partial z}{\partial v} \\ \frac{\partial x}{\partial u} \frac{\partial y}{\partial v} - \frac{\partial y}{\partial u} \frac{\partial x}{\partial v} \end{bmatrix}$$

誤:

$$\frac{\partial \mathbf{r}}{\partial u}(u, v) \times \frac{\partial \mathbf{r}}{\partial v}(u, v) = \begin{bmatrix} \frac{\partial y}{\partial u} - \frac{\partial z}{\partial v} \\ \frac{\partial z}{\partial u} - \frac{\partial x}{\partial v} \\ \frac{\partial x}{\partial u} - \frac{\partial y}{\partial v} \end{bmatrix}$$

訂正2 プリント「曲線, 曲面の扱い方」の左半分

正:

$$\int_a^b ds = \int_\alpha^\beta \left\| \frac{d\mathbf{r}}{dt}(t) \right\| dt = [C \text{ の長さ}]$$

ここで, $s = s(t) \left(\begin{array}{c|c} s & a \rightarrow b \\ \hline t & \alpha \rightarrow \beta \end{array} \right)$ の座標変換を用いた.

誤:

$$\int_a^b ds = \int_a^b \left\| \frac{d\mathbf{r}}{dt}(t) \right\| dt = [C \text{ の長さ}]$$

補足1 スカラー場 (関数) $\varphi = \varphi(x_1, x_2, \dots, x_n)$ の外微分は

$$d\varphi = \frac{\partial \varphi}{\partial x_1} dx_1 + \frac{\partial \varphi}{\partial x_2} dx_2 + \dots + \frac{\partial \varphi}{\partial x_n} dx_n$$

であった. これは「0次微分形式の外微分」である. r 次微分形式の外微分は, これの拡張である.

補足2 スター作用素は, 微分形式に対しても拡張される.

[$n = 3$ の場合]

$$\begin{aligned} *(Xdx + Ydy + Zdz) &= Xdy \wedge dz + Ydz \wedge dx + Xdx \wedge dy \\ *(Xdy \wedge dz + Ydz \wedge dx + Xdx \wedge dy) &= Xdx + Ydy + Zdz. \end{aligned}$$